

IGP-2025 新規定 : 変更内容の解説

目次

1. 全般事項
2. FCI-BH/VT (同伴犬試験)
3. FCI-IBGH (国際同伴犬試験)
4. FCI-IGP (作業犬試験)
5. FCI-IFH (追求犬試験)
6. FCI-StöPr (搜索試験)
7. FCI-IAD (持久力試験)

廃止された試験

FCI-IGP V
FCI-IGP ZTP

新たに追加された試験

FCI-IBGH Spezial
FCI-IFH 3

全般事項

すべての試験において、同じ段階に留まり繰り返し受験することが可能。

試験はレベル 1→2→3 の順に段階受験でなければならない。

次の試験段階を受験するには、前段階の試験において最低「B／可」の成績で合格していなければならない。

ただし、単課目 (FPr, UPr, SPr) には適用されない。

保有訓練資格よりも下の段階を受験（出場）することはできない。（非公式な大会を除く）

FCI 試験規定 2025 : 主な変更点

各試験 1 日あたりのセクション数

試験レベル	セクション数
FCI-BH/VT または国内 BH/VT (筆記試験なし)	2 セクション
FCI-BH/VT または国内 BH/VT (筆記試験あり)	3 セクション
FCI-FPr 1-3, FCI-UPr 1-3, FCI-SPr 1-3	1 セクション
FCI-GPr 1-3	2 セクション
FCI-IBGH 1-3	1 セクション
FCI-IFH 1	1 セクション
FCI-IFH 2	2 セクション
FCI-IFH 3 および FCI-IGP FH	3 セクション
探索指導員を使用する場合	2 セクション
FCI-IGP 1-3	3 セクション
FCI-StöPr 1-3	1 セクション
FCI-IAD	1 セクション

各試験の必須資格と受験可能月齢

試験	必須資格	最低月齢
FCI-BH/VT	なし	15 ヶ月
FCI-IBGH 1	FCI-BH/VT	15 ヶ月
FCI-IBGH 2	FCI-IBGH 1	15 ヶ月
FCI-IBGH 3	FCI-IBGH 2 / FCI-Obedience 1 / FCI-IGP 1	15 ヶ月
FCI-IGP 1	FCI-BH/VT	18 ヶ月
FCI-IGP 2	FCI-IGP 1	19 ヶ月
FCI-IGP 3	FCI-IGP 2	20 ヶ月
FCI-IFH 1	FCI-BH/VT	18 ヶ月
FCI-IFH 2	FCI-IFH 1	19 ヶ月
FCI-IFH 3	FCI-IFH 2	20 ヶ月
FCI-IGP FH	FCI-IFH 3	20 ヶ月
FCI-FPr 1-3	FCI-BH/VT	15 ヶ月
FCI-UPr 1-3	FCI-BH/VT	15 ヶ月
FCI-SPr 1-3	FCI-BH/VT	18 ヶ月
FCI-GPr 1-3	FCI-BH/VT	18 ヶ月
FCI-StöPr 1	FCI-BH/VT	15 ヶ月
FCI-StöPr 2	FCI-StöPr 1	15 ヶ月
FCI-StöPr 3	FCI-StöPr 2	15 ヶ月
FCI-IAD	FCI-BH/VT	16 ヶ月

発情中または妊娠中の雌犬について

発情中の雌犬：すべての試験に参加可能。ただし、他の参加犬と分けて審査を受ける必要がある。

妊娠中の雌犬：交配後 27 日以内であれば受験可能。

負傷のリスクが高くない試験「BH、FH、AD、探索試験」のみ受験可能。

＝試験規定にはこの詳細が記載されていない＝

試験中のウェア（訓練ベスト）着用について **NEW**

試験中、フィット感の良い（ぴったりまたは通常のサイズの）ベスト（飛び出したポケットや後から取り付けられた装置や物品がないもの）の着用は許可されます。

州が主催するイベントに関して、追加の規定を設けるかどうかは、それぞれの州組織の判断に委ねられる。

ウエストポーチやトレーニングエプロンの着用は禁止です。

SV では、訓練委員会の決定により、全国レベルの大会では訓練ベストの着用が禁止されています。

褒める行為

基本的に、褒める行為は各課題の終了後、基本姿勢でのみ許可される。

次の課題のために新しい基本姿勢をとった場合、新しい基本姿勢→約 3 秒→課題開始、この 3 秒間の間が必要である。

例外 **NEW**

FCI-BH/VT、FCI-IBGH 1、FCI-IGP 1 では、課題終了後に犬を短時間リラックスさせたり褒める行為（最大 5 秒間）が許可される。

褒める間は基本姿勢を離れてもよいが、その後、犬は再び基本姿勢をとり、約 3 秒後に次の課題を始める。

試験の開始と終了

試験の開始は試験責任者が決定する。試験の終了は成績証明書の返却をもって終了とする。表彰式も試験の一部とみなされます。

表彰式には、ハンドラーは犬とともに参加する。**その際、犬が口におもちゃや訓練用具類をくわえることは許されません。NEW**

犬には全試験中を通して、平静な態度が求められます。

すべての試験の前に性格試験が実施されます。個体識別確認（マイクロチップ番号の確認）は性格試験の必須項目であり、審査員が実施します。

犬の社会性と攻撃性に関する規則

犬に攻撃性が見られる場合、即座に失格となります。競技中のいかなる時点（試験前、試験中、試験後）で、犬が人や他の犬を咬む、咬もうとする、攻撃する、または攻撃しようとした場合、自己防衛でない限り競技から失格となります。この場合、すべてのセクションでの得点が取り消されます（すでに追求、服従、防衛すべてを完了している場合でも同様です）。ただし、犬が攻撃を受け、それに反応して自衛した場合には、ペナルティは課されません。

首輪の義務

首輪は、一重構造の大きなリンクチェーンタイプを使用し、犬にとって小さすぎない適切なサイズである必要があります（図 1 参照）。

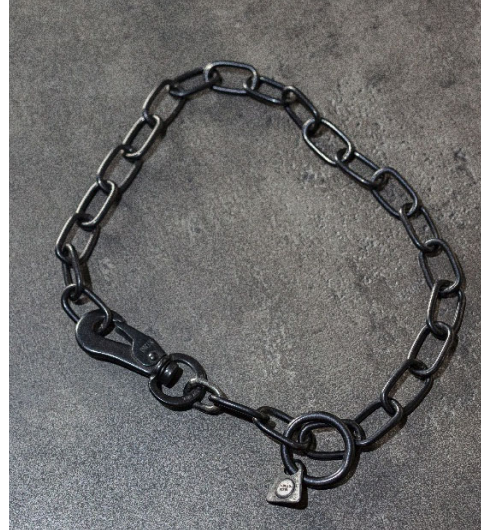
州の法律でストッパー付きの首輪が義務付けられている場合は、その規定に従う必要があります。

カラビナフック付きの首輪（開閉可能なタイプ）は、管轄の動物管理機関の許可がある場合に限り使用が認められます（図 2 参照）。

犬は、試験全体を通じて常に首輪を着用していなければなりません。

例外

FCI-BH/VT、FCI-IBGH 1-3 では、革製の首輪、布製の首輪、またはハーネスの使用も認められています。



追求ハーネス

追跡作業では、大きなリンクチェーンの首輪を使用する代わりに、追求用ハーネス、ポッチャーハーネス、またはベストタイプハーネスを使用し、それらのリング部分に 10m リードを装着することも認められています。

ダンベル持来 **NEW**

＝FCI-IBGH 2,3、FCI-IGP 1,2,3 におけるダンベル持来の実施手順は以下のとおりです＝

試験開始前に、ハンドラーと犬が基本姿勢をとる地点から 8m 先を起点として、4m×4m の正方形がマーキングされます。

投げたダンベルがマーキング外となった場合、アシスタント（例：試験監督）は審査員の指示に従い、ダンベルを、正方形の中央にあらかじめマーキングされた地点（ハンドラーと犬から 10m）に、ハンドラーから見て水平に配置します。

配置前に、アシスタントはダンベルを一度だけ短時間持ち上げ、「ここに置きます」という仕草を示します。その後、アシスタントは犬の作業エリアから退き、審査員の背後に移動します。

アシスタントがダンベルを置き直す際、ハンドラーは犬に「**Sitz (座れ)**」という命令を与えることができます。また、ハンドラーは基本姿勢を維持する必要があります。

＝すべての持来課題および試験段階において適用＝

審査員は、ダンベルが投げられた後、次のようにハンドラーに指示を出します。

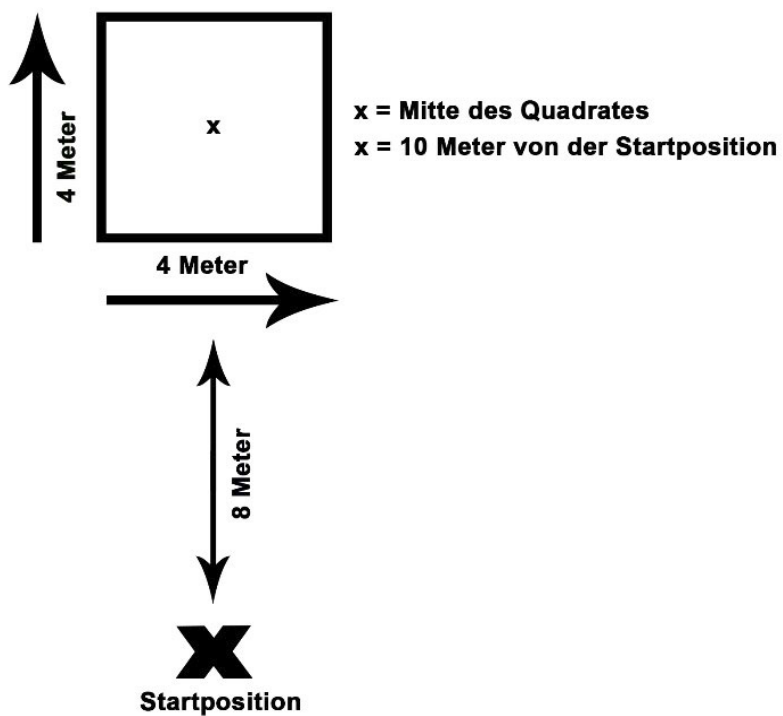
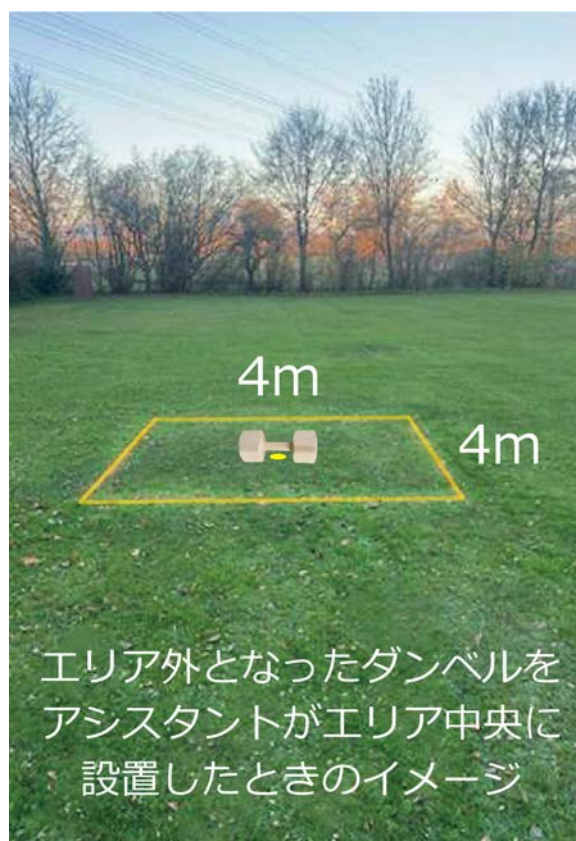
- ・ダンベルがエリア内にある場合は「持来開始」の許可をハンドラーに与えます。
- ・ダンベルがエリア外となった場合には「ストップ」の合図を出し、アシスタントによって決められた地点（ハンドラーと犬から 10m）に配置された後、「持来開始」の許可をハンドラーに与えます。

ダンベルをエリア内に投げる試みは 1 回のみ（投げ直すというルールは廃止）。

もしハンドラーが意図的にダンベルを正しく投げなかった場合、例えば、ダンベルを落とす、または数メートルしか投げないといった行為をした場合、スポーツマンシップを欠く行為として失格となります。

＝すべての試験段階において適用＝

FCI 試験規定 2025 : 主な変更点



1m 障害+持来 (FCI-IGP 2,3) 斜壁+持来 (FCI-IBGH 3、FCI-IGP 3) NEW
--

「1m 障害+持来」および「斜壁+持来」における、開始地点（障害／斜壁と基本姿勢の最低間隔）は、障害／斜壁から 4m 手前にマーキングされる。

障害／斜壁の向こう側には、障害／斜壁の位置から 6m先を起点として、幅 2m、長さ 4m の長方形エリアがマーキングされます。

= 1m 障害／斜壁から 4m 以上の間隔をとりたい場合は自由に基本姿勢位置を決めることができる =

投げたダンベルがマーキング外となった場合、アシスタント（例：試験監督）は審査員の指示に従い、ダンベルを、長方形の中央にあらかじめマーキングされた地点（障害から 8m）に、ハンドラーから見て水平に配置します。その後、アシスタントは犬の作業エリアから退き、審査員の背後に移動します。

FCI-IGP 2,3 での「1m 障害+持来」では、アシスタントはダンベルを配置する前に**一度だけ短時間持ち上げ**、「ここに置きます」という仕草を示します。

FCI-IBGH 3 および FCI-IGP 3 での「斜壁+持来」では、アシスタントはダンベルをマーキングされた地点に直接配置し、持ち上げる動作は行いません。

アシスタントがダンベルを置き直す際、ハンドラーは犬に「**Sitz (座れ)**」という命令を与えることができます。また、ハンドラーは基本姿勢を維持する必要があります。

=すべての持来課題および試験段階において適用=

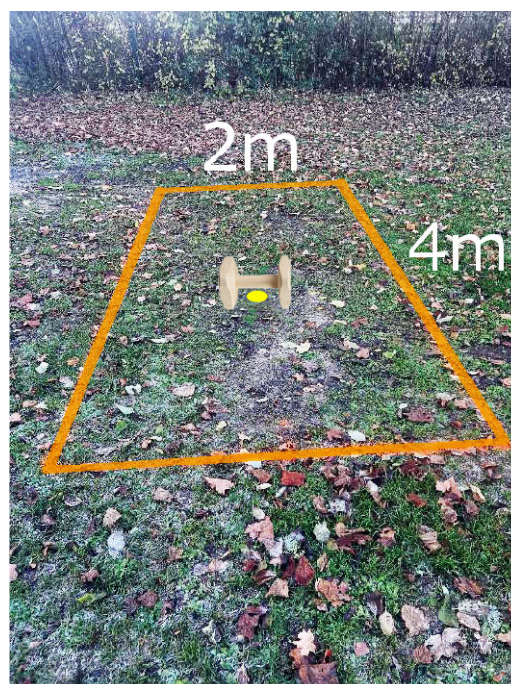
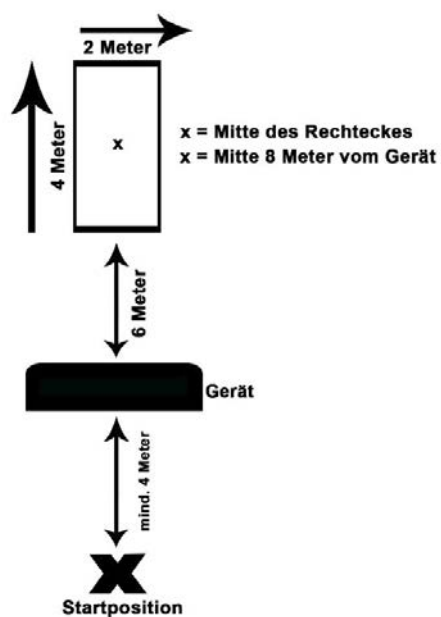
障害の寸法は、高さ 100cm、幅 150cm 変更なし

これまでどおり「固定型障害」を使用することが可能です。

すべての IGP 試験段階において、斜壁の高さは 160cm となる。

=FCI-IBGH 3 のみ、斜壁の高さは 140cm =

FCI 試験規定 2025 : 主な変更点



エリア外となったダンベルをアシスタントが
エリア中央に設置したときのイメージ



BH / VT

1. リード付き脚側行進 30 点 NEW

常歩を最低 50 歩

左反転ターン

常歩／速歩／ゆっくり／常歩（それぞれ 10～15 歩）

その後、ハンドラーは停止し、犬は指示なし停座を行う。

「停止（指示なし停座）」の後、審査員の指示に従い、ハンドラーは犬とともに群衆に進みます。ハンドラーと犬は群衆の一人に対して左回り、さらに一人に対して右回りを行い、群衆内で停止します（左回りと右回りの順番に決まりはありません）。そのとき犬は命令なしで座らなければなりません。

＝リード付き脚側行進では、右屈折、第 2 の左反転ターン、左屈折は廃止されました＝

リードなし脚側行進は廃止

2. 座れ 10 点 変更なし

3. 伏せ 10 点 変更なし

座れ／伏せの課題（2 通りの方法から選択）

その①

常歩で脚側行進を開始し、10～15 歩の間で、ハンドラーは「座れ／伏せ」の命令を与える。この際、ハンドラーは止まったり、歩度を変えたり、振り返ったりしてはいけません。

その②

常歩で脚側行進を開始し、10～15 歩の間で、ハンドラーは停止する。犬は命令なしで直ちにまっすぐ座る。その後、ハンドラーは「座れ／伏せ」の命令を与

え、犬から離れる。

座れの課題と伏せの課題は、脚側行進中に行うか、指示なし停座後に行うかを選択可能です。また、これらを交互に実施することも認められています。

例：「座れは行進中止まらずに命令」「伏せは指示なし停座後に命令」

犬が2回目の追加命令（計3回）でも呼び寄せに応じない場合、その課題は「不可／0点」と評価されます。この場合、犬は伏せの位置から次の課題、休止位置に移動する。

＝この評価方法はIGP全段階における呼び寄せ課題にも適用されます＝

4. 状況下での休止 10点 NEW

犬が伏せた後、ハンドラーは犬から**最低 10m 離れ、犬に対して横を向きます。**

褒めることについて NEW

課題終了後に犬を短時間リラックスさせたり褒める行為（最大5秒間）が許可される。

褒める間は基本姿勢を離れてもよいが、その後、犬は再び基本姿勢をとり、約3秒後に次の課題を始める。

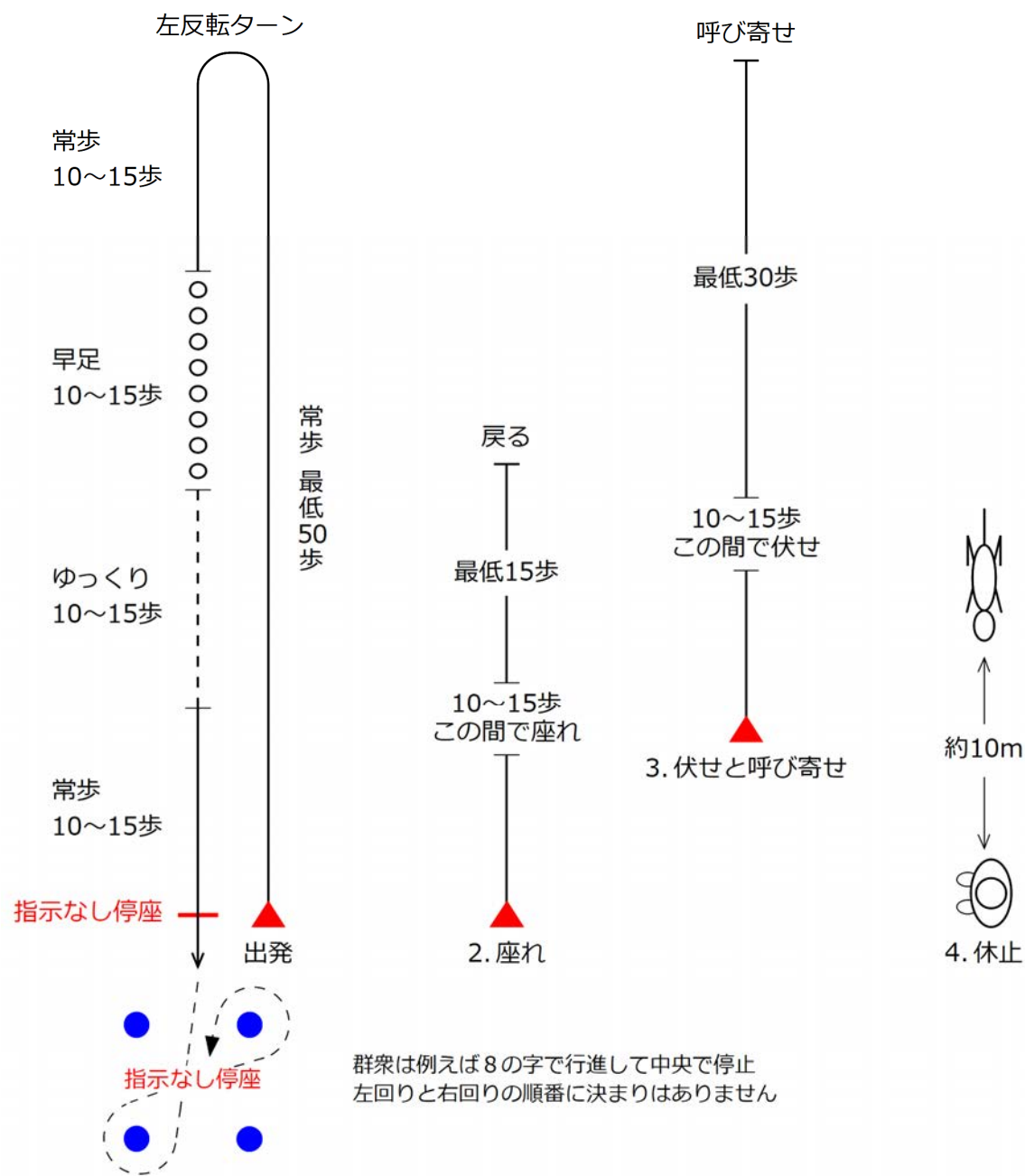
評価について

試験終了後、点数ではなく「合格」または「不合格」という結果と、審査員からの審査講評が発表されます。

主催者の要望があれば、点数による順位を発表することができます。

BH/VTの試験では、訓練場での基本的な服従の確認に加え、とりわけ交通環境での社会的適応性の確認が重要視されます。

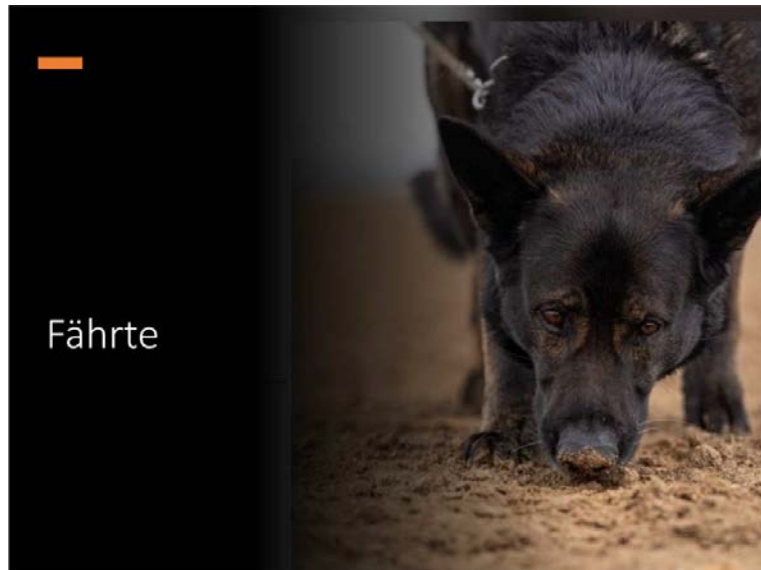
BH / VT 服従要領図



課題の説明 :

1. リード付き脚側行進	30 点
2. 常歩行進して座る (2 パターンから選択)	10 点
3. 常歩行進して伏せ (2 パターンから選択) + 呼び寄せ	10 点
4. 状況下での休止	10 点

追求／Fährtenarbeit



物品 **NEW**

犬が物品に対して少し斜めの姿勢（最大 30 度）で示しても、それは誤りとはみなされません（座る、伏せ、立止、いずれの姿勢でも）。

犬が物品を凝視する（じっと見つめ続ける）ことは求められません。

スタート地点の手前にて **NEW**

犬が開始地点に到達する前にハンドラーが「さがせ」の命令を出したり、命令を出さずに追求を開始させた場合、1 点が減点されます。

犬が開始地点に到達する前から自然に追求行動を示しても、評価においてマイナスとはなりません。

褒める行為

IGP 1 では、追求コースの直線上においてのみ、犬を軽く褒めることができます。

褒める行為がコーナー修正や補助、物品を示す前の行為として行われることは認められません。

すべての試験段階で、ハンドラーが物品を拾い上げる前または後に短時間褒めることが許可されています。

物品発見後、再スタート時、追求リードが完全に伸びきるまで犬を褒めることはできません。

中止／失格

追求作業中に野生動物が現れ、犬が興奮したが制御された。しかし、その後、追求作業を再開できなかった場合、追求作業は**中止**となります。NEW

旧試験規定では、この場合に**失格**とされていました。

IGP 1 A NEW

追求リードの長さは 5m となった。犬が追求コースから 5m 以上離れた場合、追求作業は中止となる。

追求リードの長さおよび犬とハンドラー間の距離は規定されており、それを超える長さのリードを使用して、距離を拡大することは許可されていません。

IGP 2 A 変更なし

IGP 3 A 変更なし

IGP 3 A 休憩（旧規定では FCI-FH 2 でのみ許可されていた）NEW

IGP3 においてのみ、体調や気象条件（例：高温）により、ハンドラー自身や犬が短い休憩を必要としていた場合、審査員に追求作業を一時中断するよう依頼することができます。ただし、この休憩時間は、追求作業の制限時間（20 分）に含まれます。休憩中、ハンドラーは犬の頭、目、鼻を拭いたり、水を与えたりすることが認められています。この目的のために、ハンドラーは少量の水、濡れた布、または濡れたスポンジを携行することができます。これらのアイテムは、追求作業の開始前に審査員に提示しなければなりません。犬のやる気を引き出す道具の使用は許可されません。

服従／Unterordnung



褒める行為について

褒める行為は、各課題の終了後、基本姿勢でのみ許可されます。

IGP 1 の例外 : **NEW**

犬は、各課題の終了後に短時間（最大 5 秒間）のリラックスや褒める行為が許可されています。この間、犬が基本姿勢を離れることも認められますが、その後、新しい基本姿勢をとる必要があります。基本姿勢→約 3 秒の間を置いてから、次の課題が開始されます（FCI-BH/VT に準じる）。

追加の命令

追加命令 1 回（2 回目）－1.5 点

追加命令 2 回（3 回目）－2.5 点

犬が 3 回目の命令後も動作を実行しない場合、その課題は評価なし（0 点）となります。

正面停座から終了基本姿勢への追加命令

正面停座から終了基本姿勢への追加命令 1 回（2 回目の命令）－1.5 点

正面停座から終了基本姿勢への追加命令 2 回（3 回目の命令）－2.5 点

3 回目の命令後も犬が終了基本姿勢に移動しない場合、その課題の全体は「M／不可」と評価されます。

この場合は課題終了場面の特別ルールにより、0 点とはなりません。

申告後の行動

IGP 1 では、ハンドラーはリードを装着した犬とともに審査員に申告を行います。

申告後、一方のハンドラーは「リードなし脚側行進」の開始位置に移動し、そこでリードを外します。

もう一方のハンドラーは、「状況下での休止」の位置に移動し、そこでリードを外します。

IGP 1 B

IGP 1 B リードなし脚側行進 15 点

変更なし。

IGP 1 B 常歩行進中の座れ／行進中の伏せと招呼 NEW

座れ／伏せの課題（2 通りの方法から選択）

その①

常歩で脚側行進を開始し、10～15 歩の間で、ハンドラーは「座れ／伏せ」の命令を与える。この際、ハンドラーは止まったり、歩度を変えたり、振り返ったりしてはいけません。

その②

常歩で脚側行進を開始し、10～15 歩の間で、ハンドラーは停止する。犬は命令なしで直ちにまっすぐ座る。その後、ハンドラーは「座れ／伏せ」の命令を与

FCI 試験規定 2025 : 主な変更点

え、犬から離れる。

座れの課題と伏せの課題は、脚側行進中に行うか、指示なし停座後に行うかを選択可能です。また、これらを交互に実施することも認められています。

例：「座れは行進中止まらずに命令」「伏せは指示なし停座後に命令」

=FCI-BH/VT およびFCI-IBGH 1 における座れ／伏せの課題に準じます＝

IGP 1 B ダンベル持来 650g 15 点

「ダンベルを正方形エリア内に投げる」に関する規定を参照。NEW

IGP 1 B 1m 障害 2 回の飛越／持来なし 15 点 NEW

ハンドラーと犬は障害から最低 4m 離れた位置で基本姿勢をとります。「Sitz 座れ」の命令の後、ハンドラーは障害の向こう側に移動し、障害から最低 4m 離れた位置に立ちます。

審査員の合図で、ハンドラーは「Hopp 飛べ」と「Hier 来い」の命令を与え、犬に障害を力強く飛び越えさせ、ハンドラーの正面にまっすぐ近づいて座らせます。

その後、「Fuß アトエ」の命令で犬を終了基本姿勢に移動させます。終了基本姿勢を約 3 秒示した後、同じ手順でもう一度、犬に障害を飛び越えさせます。

減点規定 : NEW

往路ジャンプで障害が倒れた場合 : 5 点減点（倒れた障害は、復路の前に正しく再設置されます）

復路ジャンプで障害が倒れた場合 : 5 点減点

往復両方のジャンプで 2 回障害が倒れた場合でも、最大 5 点の得点が可能です。

IGP 1 B 斜壁／持来なし 15 点

FCI 試験規定 2025 : 主な変更点

変更なし。ただし、斜壁の高さは 160cm **NEW**

IGP 1 B 前進と伏せ 10 点

変更なし。

IGP 1 B 状況下での休止 10 点 NEW

犬を伏せさせた後、ハンドラーは犬から**最低 10m 離れ、横を向いた状態**（右肩または左肩が犬の方向）で立ちます。

IGP 2 B

IGP 2 B リードなし脚側行進 15 点

変更なし。

IGP 2 B 常歩行進中の座れ 10 点

変更なし。

IGP 2 B 常歩行進中の伏せと招呼 10 点

変更なし。

IGP 2 B 常歩行進中の立止 10 点

変更なし。ただし、点数は 5 点から **10 点**に変更。

IGP 2 B ダンベル持来 1k 10 点

「ダンベルを正方形エリア内に投げる」に関する規定を参照。 **NEW**

IGP 2 B 1m 障害+持来 650g 15 点

「ダンベルを長方形エリアに投げる」に関する規定を参照。 **NEW**

犬が往路ジャンプの際に障害を倒した場合、そのジャンプは **4 点減点** されます。倒れた障害を犬がダンベルをくわえて復路ジャンプした場合、その復路ジャンプは **1 点のみ** と評価されます。往路ジャンプで障害が倒れてもやり直しは行いません。 **NEW**

IGP 2 B 斜壁／持来なし 10 点 NEW

ハンドラーと犬は斜壁から最低 4m 離れた位置で基本姿勢をとります。「Sitz 座れ」の命令の後、ハンドラーは斜壁の向こう側に移動し、斜壁から最低 4m 離れた位置に立ちます。

審査員の合図で、ハンドラーは「Hopp 飛べ」と「Hier 来い」の命令を与え、犬に斜壁を力強く登坂させ、ハンドラーの正面にまっすぐ近づいて座らせます。約 3 秒後、「Fuß アトエ」の命令で犬を終了基本姿勢に移動させます。

IGP 2 B 状況下での休止 10 点

犬を伏せさせた後、ハンドラーは犬から **最低 20m** 離れ、犬に背中を向けて立ちます。 **NEW** (旧規定では 30 歩離れるとされていました)

IGP 3 B

IGP 3 B リードなし脚側行進 15 点

変更なし。

IGP 3 B 常歩行進中の座れ 10 点

変更なし。ただし、点数は 5 点から **10 点** に変更。

IGP 3 B 速歩行進中の伏せと招呼 10 点

変更なし。

IGP 3 B 速歩行進中の立止と招呼 10 点

変更なし。

IGP 3 B ダンベル持来 2k 10 点

「ダンベルを正方形エリア内に投げる」に関する規定を参照。NEW

IGP 3 B 1m 障害+持来 650g 15 点

「ダンベルを長方形エリア内に投げる」に関する規定を参照。NEW

犬が往路ジャンプの際に障害を倒した場合、そのジャンプは **4 点減点** されます。倒れた障害を犬がダンベルをくわえて復路ジャンプした場合、その復路ジャンプは **1 点のみ** と評価されます。往路ジャンプで障害が倒れてもやり直しは行いません。NEW

IGP 3 B 斜壁+持来 10 点

変更なし。ただし、点数は 15 点から **10 点** に変更。NEW

「ダンベルを長方形エリア内に投げる」に関する規定を参照。

点数配分：

ダンベル持来 5 点

斜壁の往復登坂 5 点

斜壁の得点を得るには、往路と復路の両方での登坂が必須です。どちらか一方のみの登坂の場合、課題の 10 点満点から 5 点が減点されます。

例：往路の登坂を行わなかったが、それ以外（ダンベルの持来、復路の登坂、正面停座、終了基本姿勢）はすべて完全であった場合：

評価：M／不可

得点：5 点

FCI 試験規定 2025：主な変更点

投げたダンベルがマーキング外となった場合、アシスタント（例：試験監督）は審査員の指示に従い、ダンベルを、長方形の中央に持ち上げずに配置します。その後、アシスタントは犬の作業エリアから退きます。

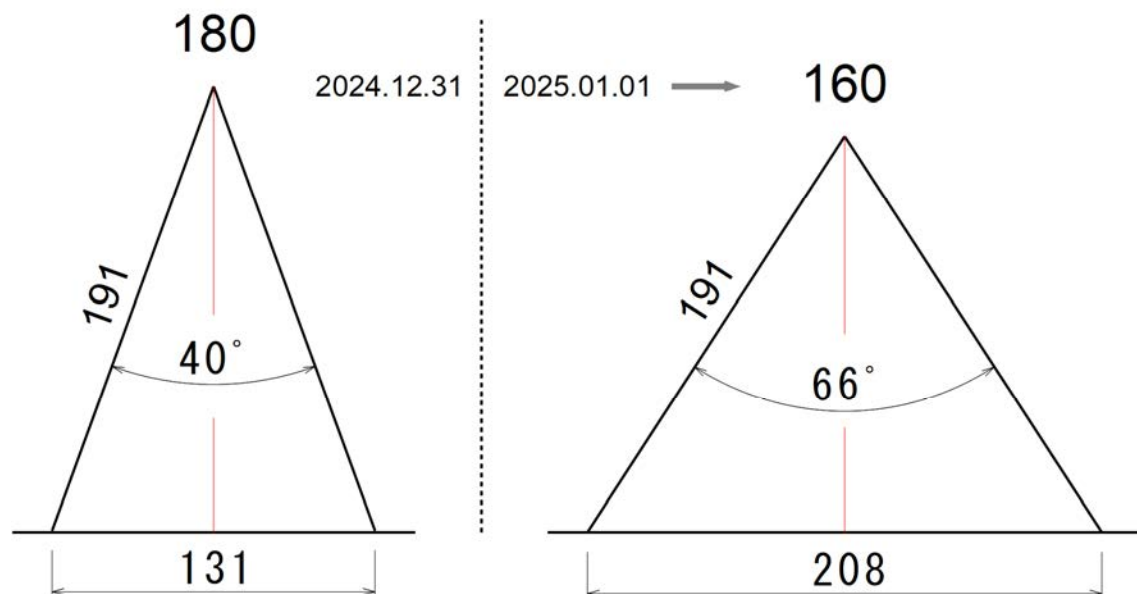
IGP 3 B 前進と伏せ 10 点

変更なし。

IGP 3 B 状況下での休止 10 点

犬を伏せさせた後、ハンドラーは犬から**最低 30 m** 離れ、犬から見えないとこ
ろ立ちます（例えば防衛テントの中）。**NEW**（旧規定では 30 歩離れるとされて
いました）

斜壁の図面



防衛／Schutzdienst



全般事項

新しい FCI 審査規定に基づき「TSB 評価」は実施されなくなりました。

TSB ausgeprägt	"a _u	「際立っている」
TSB vorhanden	"vh _u	「持っている（しかし満ち溢れていない）」
TSB nicht genügend	"ng _u	「不十分」

ただし、防衛作業の評価では、意欲／Triebbeständigkeit、自信／Selbstsicherheit、耐久性／Belastbarkeit が引き続き重要な要素として考慮されます。

現在、VDH 作業犬委員会は、VDH 内で TSB 評価を維持するための取り組みを進めており、VDH 理事会への提案も行っています。

IGP 1 C

IGP 1 C パトロール 5 点

2 ヶ所（2 つのテント）となりました。NEW

IGP 1 C ヘルパーの遠距離攻撃阻止 30 点

「禁足中のヘルパーによる攻撃を防御」が終了した後、**ハンドラーと犬は移動することではなく、ヘルパーが 20m 離れた位置に常歩で移動します。NEW**

ムチの受け取り／側面護送

側面護送はリードなしで行うとされています。ただし、規定書には明記されていないものの、リード付きで行うことも可能です。

終了後の行動

審査員への終了報告後、ハンドラーと犬は 5 歩の距離をコントロールされた状態で移動し、基本姿勢でリードを装着します。

IGP 2 C

IGP 2 C ヘルパーの遠距離攻撃阻止 20 点

「背面護送」が終了した後、**ハンドラーと犬はリードなし脚側行進で 30m 離れた待機地点に移動する。**(旧規定では 40m の移動でした) **NEW**

IGP 3 C

実施手順における変更点はない。

ヘルパーの逃走阻止

犬が待機位置のマーキングをはみ出して伏せた場合、やり直しは行われず、その状態で部分的な評価が与えられます。

背面護送

ハンドラーはヘルパーに対して、8 歩後退し、背を向けるよう指示します。そして、次の指示でヘルパーは歩き出します。

FCI 試験規定 2025 : 主な変更点

ヘルパーが離れる際に犬が防衛片袖を咬んだ場合、ハンドラーは「Aus 放せ」と「Hier Fuß 来いアトエ」の命令で、犬を基本姿勢に戻します。

犬が命令に従った場合、「背面護送」は「M／不可（3 点減点）」と評価され、その後も続行されます。

犬が命令に従わず基本姿勢に戻らなかった場合、「不服従」による失格となります。

--

以上の内容について、不明な点やご質問がございましたら、どうぞご遠慮なく SVJ までお問い合わせください。